

義兄がまだ復員していなかったのですが、秋田の実家に子供を連れて行きました。

それから父は、千厩町の食糧営団に勤務することになり、私も東磐井の郡地方事務所に就職し、毎日山越えをして通いました。

茨城に行った義兄は二人の子供とともに生活をしていましたが、一番下の子がだんだんと体の具合が悪くなり、こっちに引き取って千厩町の病院に入院させましたが、腹膜炎の炎症となり、七月二十六日に亡くなりました。避難生活中の栄養失調が原因でした。わずか一年半の寿命で、かわいさげに盛りになっていたのと思うと、哀れさがこみ上げて涙が流れます。

それからは、私は両親と一緒に生活をしていて、父は昭和三十七年に七十三歳で、母は昭和四十八年に七十九歳でそれぞれ天寿を全うしました。

希望を持って渡満し、昭和二十年の終戦を、そして引揚げ、両親は大変な苦勞をしたと思います

が、再びどうか内地に帰ることができたことは、不幸中の幸いでもあります。満州の地で無念の涙を込めて亡くなられた方の事を思うと、何とも言いようがありません。ただ、御冥福を心からお祈りするのみです。

私の引揚げ体験

東京都 塚田 斉

はじめに

私は満州の地に生を受け、戦後引き揚げるまでの約二十年間を満州で過ごした。その時代は日本が軍国主義に突き進み、日中十五年戦争と言われる泥沼に足を踏み入れてから、だんだん抜き差しならなくなっていた時期でもあった。そうして昭和二十（一九四五）年八月八日、日本に対して宣戦を布告したソ連軍が、雪崩を打って満州に攻め込んで来た。既に関東軍は南方に引き抜かれて

おり、無抵抗の開拓団はソ連軍に抗することもできず、死者、負傷者が多数出て大混乱に陥って悲惨な状況となった。さらには国共内戦のどばつちりを受けて、中国の混乱も極まってきた。私はこれらの軍隊と関わり、その後内地に引き揚げてからは、進駐していた米進駐軍の基地とも関係を持った経験がある。自分が引き揚げるまで、そして引き揚げてからの体験を通じ、接触した日本軍、各国軍隊の印象を記録して、後生への資として残したい気持ちから、体験記とした。

一 日本陸軍

関東軍は、もともとは南満州鉄道の警護と付属地居留民の保護を目的として発足した、独立守備隊という小さな部隊に過ぎなかった。やがて関東軍司令官は、特命全權大使を兼ねて、現地での日本政府を代表する地位に立つとともに、満州国政府の国政に関して指導をするまでになっていた。

新京（長春）にはいくつかの大学もあったが、

それらは満州国政府の所管であった。私が在学した新京第一中学校は、関東軍司令部の膝元であり、日本人が設置した代表的教育機関であったので、司令官が交代するときは新旧司令官が来校し、全生徒の前で挨拶を述べるのが例であった。そして、教育について軍の関心が強かったためか、当時の校長は陸軍の退役の中将閣下であった。

やがて戦局の進展に伴い、軍事教練の授業時間は年々増加したが、特に記憶に残ることを挙げれば、五年生のときに軍事教練の仕上げとして実弾射撃を体験したり、関東軍の部隊に三日間入営し、部隊生活を体験したこともあった。これは短期のことであったので、平素うわさに聞いていた私的制裁などはなかったが、野外での演習と内務班での生活は、初年兵とまったく同じように激しいものであった。そして中等学校以上の学生全部が参加して、日露戦争の激戦地であった遼陽の首山堡（橘中佐戦死の場所）や、旅順の戦跡地区で

行う連合演習は実践しながらで、これらに参加したときの情景は忘れられない。

別にちよつと変わった経験として、中学で寮生活をしていたころ、軍の要請で防毒マスクの耐効テストに協力したことがある。厳寒時の朝四時ごろ起きて、零下二十数度の戸外で防毒マスクを着用して行進し、眼鏡ガラスの曇りの発生状況を調査するものであった。

戦争の末期には、徴兵年齢が満二十歳から一歳引き下げられて十九歳となり、身体検査の日も幾分早められた。私は、昭和二十年の正月を過ぎて間もないころ徴兵検査を受け、乙種合格とされ召集令状を受け取ったが、入営することもなく終戦を迎えた。

戦後では軍隊と言えるかどうかは別として、自衛隊の一日体験入隊に招待され、空挺部隊の訓練に参加した。この訓練はパラシュートなどの装備を身につけ兵員輸送機に乗り、羽田飛行場を飛び立って東京湾を横断、木更津飛行場との間を往復

するものであった。輸送機内は貨物室のようなもので、高い所に小さな窓があるだけで、座席は折り畳み椅子をボルトで床に固定しただけのものであった。

二 満州国軍

満州国軍は関東軍の補助的役割を果たすものとして、すべて日本軍を手本としていた。訓練も日本陸軍の幹部の指導で行われていた。将兵の制服や階級章は日本軍のものによく似ていたが、階級章の地色が日本軍では赤であったのに対し、満軍のは桃色であり、帽子やボタンのデザインが、満州国の国花である蘭をかたどったものであった。

昭和十五年に満州国で国兵法（徴兵制度）が制定され、満十九歳の青年で国兵検査を受けた者の中から選抜された者が三年の兵役に服するものと定められた。当時、このことを記念して発行された郵便切手の図柄が記憶に残っている。そして翌年の昭和十六年に初めて国兵調査が実施された。

満軍の人的構成の主体は、もちろん漢民族で

あつたが、かなりの数の蒙古民族も含まれていたようである。将校を養成する機関として軍官学校があつたが、ここは日本民族や朝鮮民族にも門戸が開放されていたので、私の中学校の先輩や同輩で進学した者もいた。そして、軍官学校では訓練の最後の仕上げに、日本の陸軍士官学校に留学させることになっていて、この出身者で、後日韓国の著名な政治家や軍人になつた人も何人かいたし、私の学友で韓国の高官の地位に就いた人もいた。

私と満州国軍との直接の触れ合いはほとんどなかったが、日曜日などの休日に、満軍の兵が自由行動で街中に外出しているのをよく見かけた。彼らは街路上で日本軍の将校に出会ふと、立ち止まって挙手の敬礼をしていた。小学生時代の親友の父親が、満軍に入って将官となつたが、公邸には車庫があり、父親は公用車で勤務先に送迎されていた。また、ほかの一人の中国人の親友の父親は満軍の中堅将校であつたが、それぞれの家に何

度か遊びに行つたことがある。

三 終戦時の身辺の事情

昭和二十年の春からは学徒動員が行われ、学校に行かずに大連の鉄道工場で作業に従事した。工場の作業では、後日まで話題にされる特急機関車「アジア号」の整備に従事し、その本体や部分品に直接触れたこともある。このころのことで記憶に残るものとして、四月三十日、ヒトラー総統の自殺に続いて、五月八日、ドイツ軍が降伏した。このとき数人のドイツ外交官が、腕に喪章をつけて街頭を歩いていたのが印象に残っている。

やがて八月十五日を迎えたが、この日は朝から工場内の雰囲気がなんとなく異常であつた。工員の大多数を占める中国人が、始業のベルが鳴つても車座になつて、座り込んだままひそひそ話を続けていた。日本人従業員は正午の玉音放送を聞いた。私たちは学校が夏休み中であつて、今後授業を再開するのか解散するのか何も分からないので、寮生活をやめて各自自宅に帰ることにした。

しかし自宅が北満の者は帰るに帰れず、お互い行く先も再会の見通しもつかないままの慌ただしい別離のひと幕であった。

私は新京に帰るために、十七日の夜行列車に乗った。十八日の午後には新京に着くはずだった列車は、奉天（瀋陽）で運行を打ち切り、再開の見通しはつかないと言ったことであつた。

幸い奉天に親戚があつたので、ひとまずそこを訪ねることにした。親戚の家は奉天城を通り越した市街地で、中国人街に囲まれていた。親戚の家に着いてすぐ、中国人による集団略奪が始まつた。親戚のうちから数百メートルくらいの所で、まるで鳥の大群の鳴き声にも似た大衆の叫び声が聞こえ始め、それがだんだん近づいて来るのである。私たちは家の中で小さくなって潜んでいた。

暴動は数日間続いたがやがて収まり、幸いなことに親戚の家に被害は及ばなかつた。

そうこうしている間に、不定期ではあるが北満行きの列車が日に一本運行するようになったの

で、親戚の家を出て無事新京に到着した。新京には既にソ連軍が進駐していて、私の家にはだれもいなかった。近所の人に聞いてみると、家族は父の勤務先の事業所がある、郊外の小さな町へ疎開したということであつた。

その街は新京と吉林のほぼ中間にあり、列車で行けば一時間余りの場所である。父母ら四人は馬車に乗り、もう一台の荷馬車に家財道具を積んで避難したということであつた。私が列車でそこへたどり着いてみると家族は無事で、現地の事業所に勤務していた独身の人と一緒に、事業所の建物で同居していた。家財道具を積んだ荷馬車は途中で略奪に遭い、行方不明になつたということであつた。

この街でも、連日現地人のデモ行進が行われ、「抗日勝利万歳」とか「打倒日本帝国」とか叫びながら家の前を通るので、みんな息を潜めて室内に閉じこもっていた。新京では危ないと思つて疎開して来たのに、この有様ではどうにもならない

と思ひ返し、約一週間経つてから今度は列車で新京の自宅に戻つた。

家族のうち中学三年生の弟は、昭和二十年の春から勤勞奉仕のため東滿国境の東寧へ出掛けていたが、消息不明でその安否が氣遣われていたが、十月二十日新京の自宅に無事帰つて来た。弟は勤勞員の学徒百余人と一緒に、ソ連軍が侵攻を始めたとき、直ちに現地を脱出し、徒歩で各地の難民收容所などを泊まり歩き、あとは列車を乗り継いで新京に帰つて来たということであつた。この百余人の集団逃避行については、弟の同期生、谷口佑君が書いて読売新聞社から出された『子羊たちの戦場』に詳しく述べられている。

また奉天の会社に勤務していた長兄は、会社の残務整理の都合があつて、すぐには帰宅できなかった。その直後交通が途絶したので、帰宅できたのは列車の運行が再開した晩秋のころであつた。さらに、旅順の学校に進学していたすぐ下の弟は、新京に帰るチャンスを失つて大連地区に残

留したため、私たちとは別行動となつてしまい、引揚げは半年ほど遅れてしまった。

四 ソ連軍

終戦が近いどさくさにまぎれて、いち早く滿州に進撃して来たのはソ連軍であつた。初めて見たその軍隊の構成員は、西欧系の者、東欧系の者、モンゴルなどアジア系の者が混在し、さらに女性兵もいたことは驚きであつた。彼ら兵士の服装はその生地や縫製、染色ともにお粗末なもので、中にはひどく汚れたままの服を着ている者もいた。背囊は持たず、身の回りの品は大きな信玄袋の形をしたナップザックを担いでいた。しかし、いずれも円形の弾倉が付いたマンドリンと称する自動小銃を携行し、また戦車は日本軍のものよりずっと大きく、頑丈そうであつたのには感心した。ジープやトラックもよく見かけたが、アメリカ製のものもかなり混じつていた。

投降した関東軍兵士が、捕虜としてシベリア方面へ送られているという話を聞いていたが、それ

が一段落したと思われる十月下旬ごろ、居住していた新京市内のソ連軍の地区司令官から、次のような布告が出された。「過去に軍籍のあった者は十月〇〇日の午前〇時に、近所の〇〇広場に集合せよ。もし事実を隠して出頭せず、後日発覚した場合には、その者を厳罰に処す」。当時「過去に軍籍」といつても幾通りかの状況の人がいた。かつて兵歴はあったが終戦時に兵籍にいなかった人、ソ連参戦直後の根こそぎ召集で、入隊した途端に終戦になり召集解除されて帰宅した人、また少数ではあるが、現地の隊長の判断で部隊を解散したとか、どさくさにまぎれて隊を離脱して帰宅した人など、いろいろな立場の人がいたのである。これらの人々のうち、何割くらいの人が指定の場所に集まったのかは知らないが、当日出頭した人は、「多分人員点呼であろうか、もしかしたら使役に使われるかもしれないが、その日のうちに帰れるもの」と思っ、手ぶらで出掛けた人が多かったようである。しかしこれらの人々は、郊

外の南嶺収容所（元日本軍兵舎）に入れられ、すぐに帰れるという様子ではなかったということ、このときに出頭したあとに命懸けで脱出して来た人から聞いて分かった。このとき南嶺に収容された人々は、このあとに黒河からブラゴエシチェンスクを経由して、シベリアへ送られたと聞いたのはずっと後年になってからである。

このようなことが行われたのは、日本軍が降伏した時点の兵員数に対し、病弱者や負傷者などシベリア送りに堪えられない者を差し引くと欠員が生じるので、その穴埋めであったとされている。

当時この布告を見た私は、ハタと困惑した。というのは、既に徴兵検査を受け合格した者は、軍籍に登録されていると聞いていたので、当日出頭すべきか迷った挙げ句に、「実際に入隊したわけではないし、出頭してもどうせロクなことではないであろう」と思っ、出頭しなかった。もしこのとき出頭していたら、シベリア送りになったわけで、このことを思い出すと今でも背筋が寒くな

る。

ハルビンにいた知人の話によると、ハルビン市内でもソ連軍による男狩りが行われ、在住していた日本人の成人男子が香防の収容所に集められたあと、東満の国境地帯に連行された。しかし、どういうわけか途中で方針が変わり、牡丹江^{ホタンコウ}付近で釈放されたので、ほとんどの人は約一週間後にハルビンに戻ったということである。

市内のめぼしい邸宅は、ソ連軍の将校宿舍として接収されたが、うっかりその前を通りかかると歩哨に捕まって、ジャガイモの皮むきや石炭運びなどの作業をさせられるので、そのような場所は避けて通らなければならなかった。

女性兵士は、独ソ戦で兵力の損耗が激しかったので徴募されたものと思われるが、男性兵士と同じような制服を着て、背中に自動小銃を背負っていた。市内では、彼女らが交差点で交通整理をしたり、また電信兵が革靴にリング状の金具をつけて電柱に上り下りするのを見て、男勝りなのに感

心した。

季節は秋から冬へと移り十二月になったころ、ソ連兵から日本人居留民会を通じて、使役提供の指令があった。作業の内容は、戦利品として押収した関東軍の物資を、ソ連に送り出す仕事であった。南新京駅付近の郊外に、食糧をはじめ各種の備品、消耗品、機器類等膨大な物資が野積みされ、テントを被せた状態で集積されていた。これらの物品をトラックに積むか、あるいは引き込み線に入って来た貨車に積み込むものであった。日中でもマイナス二十度に近い、吹きさらしの中の作業であった。みすみす我が軍の物資が強奪されるのを手伝うことに、何ともやりきれない思いがした。

この作業で記憶に残ることを幾つか挙げると、ある日学校の教室にあるような机と椅子を運び出す作業をした。もとよりみんなは勤労意欲も乏しく、チンタラチンタラ運んでいると、監督の女性兵士からハツパを掛けられた。彼女は「作業はこ

のようにするのだ」と言うのと、いきなり机を両脇に一個ずつ軽々と抱え、一度に二個の机を運んだ。私たちは、当時粗末な食事しかとれずやせていたのに、彼女らはもともと体格が良い上に、飽食しているというハンディはあったにしても、目の前で見せつけられた彼女らの馬力には恐れ入るほかなかった。

またある日、黒豆や緑豆の詰まった麻袋を貨車に積んだが、一袋の目方が八十キログラムくらいあって、とても重いものであった。するとその脇に、三十キログラムくらいの比較的軽い袋があり、その中身は「ナマコ」であった。ソ連軍としては、「こんなけつたいな物はいらん。労働者にくれてやれ」ということになったのであろう。「帰りに一袋ずつ持ち帰ってよい」と言われた。現地に長く住んでいる人には周知の通り、乾燥ナマコは中華料理材料として貴重な物であるが、作業仲間ではそんなこととは知らず、すぐに食べられそうもないし、持ち帰るにしても重くて大変だ

と権利を放棄した人がいた。私は「これは儲けもの」と思つて譲り受け、寒中に大汗をかき、休み自宅に運んだ。これは、後日小分けして中華街の乾物屋に持ち込んで換金したが、その額は当時の労働者の一カ月の賃金に相当するものであった。

また別の日、仲間内の若手が、数人で石炭運びの作業に従事した。それぞれがシャベル持参である。軍用トラックに上乗りして、駅に近い貯炭場で石炭を積み、ソ連軍の宿舎へ運ぶものであった。午前と午後に各一回往復し、三台目の石炭を積み込んだときは、短い冬の日はや暮れようとしていた。そのトラックは市街地に入る途中で方向を変え、中華街へ向かった。そして湯池たくち（中国式風呂屋）の前で止まり、警備兵と風呂屋の主人との間で交渉が始まった。「この石炭をこれこれの値段で買わないか」「それは高い。もつと負けてくれ」。ひとしきりやりとりがあった後、やがて商談が成立してそこに石炭を降ろした。その後

トラックを返した警備兵は、みんなをその近所の中華料理店へ連れて行き、盛大にごちそうしてくれた。横流しした石炭代金のお裾分けのつもりか、あるいは口止め料の意味があったのかもしれない。この作業は一カ月くらいで終わった。

昭和二十一年の新年を迎えて間もなく、別の作業場に移った。そこは、中学校の近所の旧陸軍官舎街であった。そのあたりの建物は終戦直後の略奪に遭い、既に家財はもちろん窓枠や床板もはぎ取られ、廃屋同然の姿であったが、何とその建物に固定しているボイラーや配管を取り外して、トラックに積み込む作業であった。この作業は、スパナやパイプレンチ、レバー、ジャッキなどの工具を使って行う手間の掛かる仕事であった。

ある日、ソ連の警備兵が作業場を離れていたときに、小銃を持った中国側公安局の数人の警官が我々の前に現れ、「中国政府が接収した日本軍の資産を、勝手に取り外して持ち出すことは犯罪であるから、お前たちを逮捕する」と宣言した。そ

こで、仲間の一人が急いでソ連軍の現場司令所に
ご注進に及んだところ、ソ連軍将校が飛んで来て
公安局員と激しい口論となり、ソ連軍将校は腰に
つるしたピストルを構えてわめき散らし、彼らを
追っ払うといったひと幕もあった。

この作業が終わり、ソ連軍から解放されたのは
旧正月のころであった。ときには「ダワイ、ダワ
イ」と追い立てられたこともあったが、ノルマ達
成のための無理な作業を強いられたような記憶も
なく、何よりも自宅からの通勤だったので、シベ
リアに抑留された人々に比べると苦労などと言え
たものではなかった。

四月に入るとソ連軍は撤退したが、代わって私
服姿のソ連人をちらほら見かけた。

五 中華民国政府軍

ソ連軍の撤退により軍政は解かれ、現地の行政
は一応国民政府に引き継がれた。そして蒋介石総
統の「暴に報いるに暴を持ってせず」と温情ある
声明が出されたためか、市内は一応平穏が保たれ

た。しかし、国共の対立が日増しに高まり、やがて政情は不安定になっていった。

大都市を除く地方では八路军が勢力を増し、満州に進出しようとしていた国民政府の直轄軍（中央軍）は、途中で阻まれ現地には到達できなかつた。新京地区でも、刻々と押し迫ってくる八路军とその工作員潜入を警戒して、近郊の交通を制限し、要所要所の検問所を設けて警戒していた。

私は中華街に出入りするには支那服が都合がよいのでよく着ていたが、検問所ではたいい呼び止められ、身分証明書を持っているか確かめられ、拳銃など武器を隠し持っていないか身体検査をされた。検問所の兵士から「止まれ」と声を掛けられると同時に、実弾入りのピストルを胸に突きつけられるのである。少しでも逃げるような気配を見せれば、ズドンと一発で一巻の終わりである。あまり気持ちの良いものではなかった。

このころに、短期間ではあったが使役に駆り出された。飛行場の整地や、郊外から市内に通じる

要路に、簡易なトーチカを築造する仕事であった。当時の彼らの軍隊は、急遽現地で編成されたもので、旧満州国官憲の一部の者が中核になっていたのであろうか、彼らは片言の日本語を使つて「気をつけ」「整列」「番号」などと号令を掛けて、私たちに気合いを入れていた。しかし、私たちが手伝つた防御構築物も八路军に突破され、国民政府軍は雲散霧消してしまつた。

その後、南方から再編成された国民政府が奉天、四平を経て、新京に入城して来た。この部隊は、米式装備による精強部隊のようであつたが、兵士は中国南方地域の出身者らしく、彼らが話す南方語は、現地の中国人にはほとんど通じないような光景が街中で見られた。私は、この国民政府直系の軍隊が進駐してきて間もなく引揚げが始まつたので、この軍隊と直接接触することは無かつた。

余談になるが、「気をつけ」の号令は、中国語では「立正^{リ、チョン}」である。私たちは「気をつけ」と

言われれば、反射的に不動の姿勢をとることを体で覚えてしまっているが、改めて考えると「一体何に気をつけるというのだろう」という素朴な疑問が湧いてくる。日本軍の場合は、恐らく明治の初期、建軍のときに西洋の軍隊を見習って、ヨーロッパで用いられる「アテンション」(米・英)「アテンション」(仏)を直訳したものと思われるが、「アテンション」のもともとの意味は「精神を集中せよ」とか、強いて一口で言えば「集中」とか「緊張」であろう。「気をつけ」の訳語も分かるが、むしろ外見的なものを重視して、「立正」(正しく立て、あるいは直立せよ)という言葉の方的確なものはなかるうか。

六 中共軍(八路軍)

戦時中に、華北地区で編成された中国共産党の軍隊が八路軍である。満州国時代から地下活動を行っていたが、日本の敗戦後いち早く満州地方に進出して来た。そしてソ連軍が関東軍から押収した武器を入手し、装備が格段に向上したことも

あって、一挙に勢力を拡大した。

彼らはやがて新京にも攻め入って来た。その日の午前中は往来する人もまばらであったが、午後には私の家の付近にも流れ弾が飛んで来るようになったので、窓際に畳を立てかけたりした。真夜中に激しくドアを叩かれたので恐る恐るドアを開けると、武装した土民兵が数人立っていて、「全員外に出ろ」と言われたときには、彼らに連行されるのかと思ったが、彼らは室内を点検し国民党軍の残党が隠れていないかを確かめると、「一部屋を空けろ」「病人を寝かせる一組の布団を貸せ」と要求して、結局数日滞在した。隣近所の家にも、同じように分宿していた。女性兵士もいて、女性は別にまとまって宿泊していた。

彼らの服装は木綿の菜っぱ服(冬は綿入り)に猟師のような帽子(耳覆いを上にあげ、紐で結ぶもの)を被り、手縫いのような布製の弾薬帯を肩から掛けていた。班長らしい者は、木製の大きなケースに収めたピストルを腰にぶら下げていた。

靴は、現地人が通常履いていた布鞋フイシエ（運動靴タイプであるが、底も布製で耐久性は布製のわらじ程度であろう）を履いていた。ある者は雨傘を背負い、ある者は胸ポケットに齒ブラシやスプーンを挿していた。隊列を組んで行進するときは、一部の兵士が鍋や釜など炊事用具を天秤棒につるして、後尾に着いていた。

彼らは、前日の戦闘で戦死した同僚数人の遺体を我が家の庭に運び込んで来たが、やがて馬車に積んでどこかへ運んで行った。この戦闘中に、一部の日本人が負傷兵の担架搬送などの危険な作業に駆り出されたが、我が家からは兄が参加したので、私は行かずに済んだ。

この八路軍の一隊が我が家に滞在していた間、水道の水以外一切物品の要求をせず、炊事は庭に鍋を据えて煮炊きしていた。八路軍には「三大規律、八項注意」というのがあって、その中に「人民大衆の物は針一本、糸一筋でも奪ってはならない」というのがあった。中国では一般に、社会人

が守るべき道徳として八つの規範があり、この規範を守れない無頼の徒を侮辱する意味から「忘八ワシヤ」という言葉があるが、八路軍の名称は、規律正しい軍隊という由来を示すものと聞いたことがある。

彼らは、実践においてこそぞと思われるときには勇敢に戦うが、体勢が不利なときには決して無理な戦いをせず、いち早く撤退して体勢を立て直すという柔軟さがあるようであった。私たちが住んでいた約一年の間に、彼らが一夜のうちに潮の引くように戦線から離脱したのを二度も見た。

私たちが引き揚げた時期は、国共両軍の間で一時的に休戦協定が成立し、長春は国民政府軍の管轄下に入ったが、後日八路軍が要路を封鎖して兵糧攻めをしたので、市民が飢餓地獄に陥って国府守備軍が降伏した。

七 引揚げ時の状況

終戦翌年の夏に、南新京駅から引揚列車に乗った。割り当てられたのは床だけの貨車であったの

で、自分らで木の囲いをつけ、仮設便所も作ったが、屋根までは手が回らず、雨のときには傘をさした。途中、操車場の都合で奉天駅で下車、鉄西地区の倉庫に二日ほど滞在したが、運行を再開した列車で無事錦州の収容所へ入った。ここで船待ちのため十日くらい滞在したが、腸チフスが流行して何人かの死者が出た。同じ集団にいた私の親しい学友も両親を相次いで亡くし、グループの人に手伝わってもらって近所の山裾に埋葬した。

やがて、引揚船が到着したというので乗船地の葫蘆島コロトウに向かった。その船は戦時標準型航空母艦「熊野丸」で、約一万吨の大きなものであった。この船は陸軍が建造したものだと言っていたが、船が不足で陸軍が作ったのか、何か海軍とのいさかいがあつてそうだったのか、そういうえば戦争末期には海軍との確執から、陸軍にも船舶兵という兵種があつた。

私は、大きな船で外洋に出るのは初めての経験であつた。話には聞いていたが、玄界灘のローリ

ングやピッチングは厳しく、いささか閉口した。しかし航海は順調に進行し、三日後には佐世保港に着いた。ただ検疫のため六週間も足止めされ、上陸したのは十月になってからであつた。新京を出てから二カ月余りの長旅であつた。年老いた父は出発前から体調を崩していたが、これに疲労が重なつたためであろう、せつかく本土を目の前に見ながら亡くなつてしまった。衰弱死である。遺骸はボートで陸に運ばれ荼毘に付されることになり、私たちはデッキで父と別れ、上陸したときに白木の箱に納められた父の遺骨と対面した。

日本に到着後判明したのであるが、満州で入隊し、終戦時所在不明であつた次兄が復員して、東京に定住していた。私たち一家は、知人を頼ってひとまず地方都市に落ち着いたが、そこでは適当な就職口も見付かりそうになかつたので、母親と弟妹を残して長兄と私は次兄を頼って上京した。当時食糧事情から東京への転入は制限されていたが、引揚者は特別に認められていた。東京ではさ

すがに復興への活気がみなぎって、いろいろと働き口があった。

長兄と次兄はそれぞれ会社勤めをしたが、私は学業も中途半端であったので、今で言うフリーターのように、その日暮らしのアルバイトをししばらく続けた。その後、少し腰を落ち着けて働く場所として、米進駐軍基地の労務作業に従事することにした。

八 アメリカ軍

大手の建設業者、今で言うゼネコンが、米軍基地内の建設業務や雑役労務一切を請け負っていたのであるが、私が従事したのは、基地内の衛生保持のための消毒を行う作業であった。私たちに支給される給料は多分占領費という日本政府が支出するものだったと思うが、現場での作業の指揮はすべて米軍の下士官がとっていた。このように、給与の支払者と現場の管理者が異なるという隙間に入ってしまったせいかもしれないが、毎日の仕事は午前と午後に各一回短時間に済ませると、あ

とは暇が十分あり、適当に仲間とおしゃべりしたりして、のんびりしたものであった。

作業の監督者である下士官は、敗戦国民である私たちに對しても居丈高な態度は取らず、一応私たちの人格を認めてくれていた。ときに作業のやり方がまずく、出来上がりが気に入らないときでも、決して手を挙げてビンタをはるようなことは無かった。彼らの気分によっては、スナックバーに立ち寄ってコココーラをおごってくれた。当時、コココーラはまったく市販されておらず、コーラも生一本というか、今のものより薬くさかったような記憶がある。

彼ら米軍人の間では、勤務中の上司と部下の関係を除けば、まったく対等な人間関係に立っているようで、かつての日本軍のように休日に出出中の兵士が町中で将校に出会ったら、直屬でなくとも敬礼しなければならぬというような様子は見られなかった。

このように勤務は比較的気楽であったし、居心

地も悪くなかったので、当分続けても良いような
気もしたが、進学の予定もあつて約半年勤めて辞
めることにした。

以上の如く見聞した各国軍隊についての所感
は、外からちよつとのぞいたものに過ぎないが、
軍隊という共通の組織でも、それぞれの国柄や民
性を反映しているものと思われる。

日本の陸海軍では、「殴ることによつて軍人精
神をたたき込む」という風潮もあつたようだが、
私の見た外国の軍隊ではいづれもそのような気配
はなかつた。これは風俗、習慣、思考方式の差異
からくるものであるが、たとえば中国人は喧嘩
をするときは決して手を出さず、大衆の面前でお
互いが顔を近づけて、相手につばが掛かるような
状態で面罵し合い、たまりかねて手を出せば、出
した方が負けと判定されると聞いたことがある。

また、ヨーロッパ系の人たちの、互いに親しい間
柄ではキス、抱擁といったスキンシップが行われ
るが、その反面一般的には他人との体の接触を非

常に嫌うものである。人混みの中で体が他人と
ちよつとでも触れれば、必ず「エクスキューズ
ミー」とか「パードン」などと釈明している。

一般に外国人にあつては、相手を殴るというこ
とは大変野蛮な行爲と考えられ、たとえ軍隊にお
いてでも、上官から理不尽な暴力行爲を受けたと
きは、部下は堂々と抗議するものであると聞いて
いる。このような点については、戦後の我が国の
民主化によつて、日本人も昔とはかなり考え方が
変わったのではなからうかと思つている。

なお、私の進学については、米軍基地で働いた
ときの蓄えをもとに、やれるところまでやつて、
続かなければ退学、再就職するつもりであつた
が、奨学金がもらえなし、多少の不足はアルバイト
で補い、何とか所期の目的を達することができ
た。

以上、引揚げを挟んだ前後の数年間に激変した
世情を体験し、たまたま触れた各国の軍隊事情が
深く印象に残つていたので、引揚げの体験を中心

にして、それぞれ感じたままを記録にとどめた。

生き地獄から戻った私！

東京都 苗村 富子

一 渡満までのこと

私は大正九（一九二〇）年に、当時の滋賀県大津市の滋賀里在の一農山村の農家に生まれ、両親と兄弟妹たちの温かい庇護のもとに、貧乏ながら平穏な毎日を過ごしていました。生まれてしばらくすると、この地方にも初めて電灯がとまり、それまでの薄暗い石油ランプの明るさから、裸電球の中の赤いフィラメントの光に、新しい生活が生まれてきたことを強く感じて、とても印象的だったことを昨日のことに思い出します。

当時の日本は、大正中期から昭和の初期にかけて、世界中を震撼させた「世界金融大恐慌」の影響を受けて、後に「昭和の大恐慌」と言われる大

不況の波に洗われていました。

そのころの世情を端的に表していて日本中の人々の涙を誘った、『女工哀史』に書かれている通りの世でした。

そのうえに、昭和三（一九二八）、四年ごろになると東北地方から北陸地方に及ぶ広い範囲で、冷害が続くという天災にも見舞われて、農作物の収穫が無く、特に農村では「今日食べる物も無い」という悲惨な生活をするようになり、貧乏もどん底という時代となりました。

農村の二、三男は、働きたくとも働く場所がなく、耕すにも耕す土地が無いという有様で、あちこちで土地に起因する骨肉の争いが起きていました。

また、製糸工場などに働きに出ている娘たちも、製糸工場の軒並みの倒産廃業により、雀の涙ほどの手切れ金で解雇されてしまい、やむを得ずに故郷に戻り、東北、北陸の農村では、そのような男女があふれていて深刻な社会問題をもたらした。